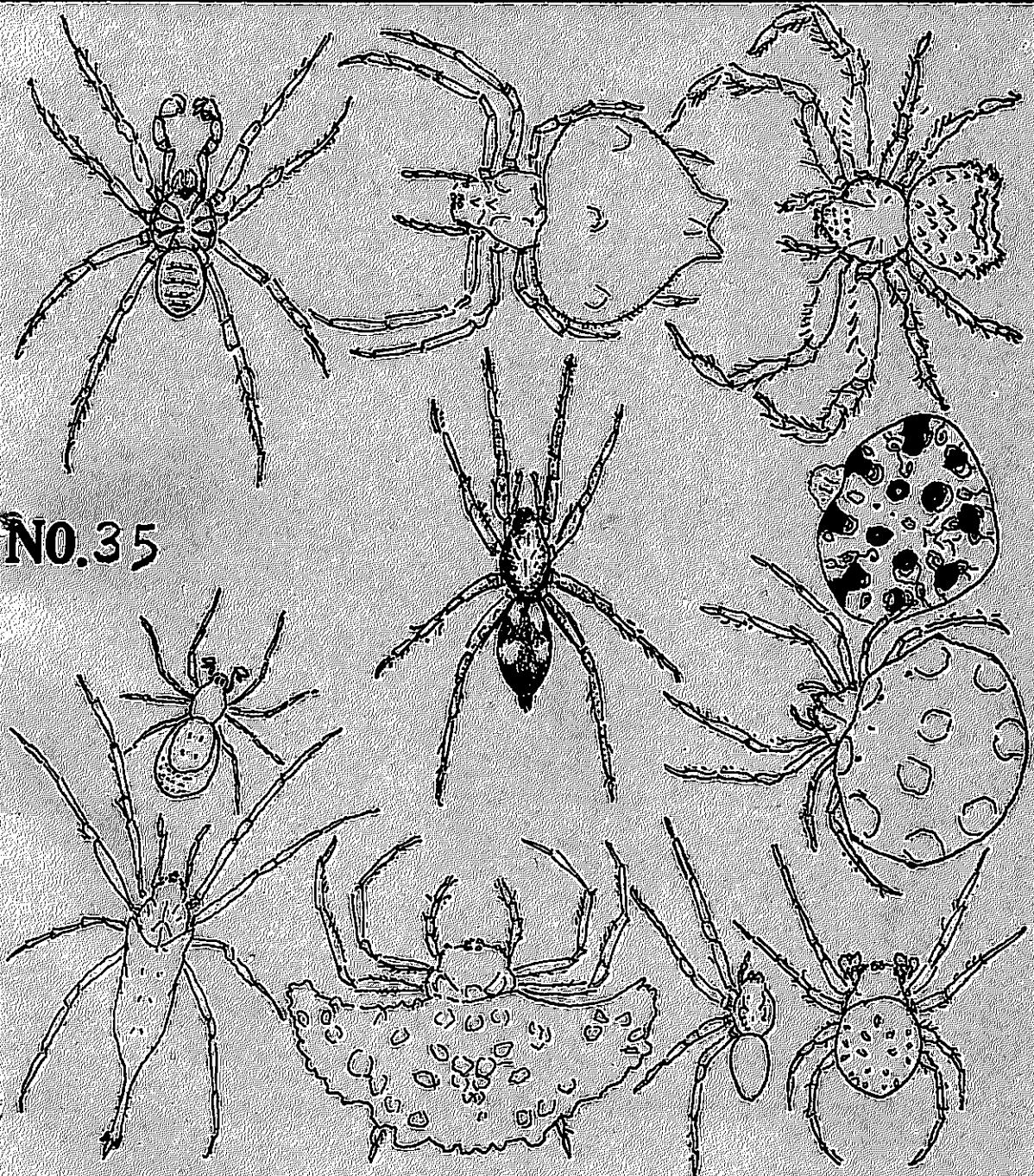


東京蜘蛛談話会会誌

# KISHIDAI A



NO.35

東京蜘蛛談話会 東京都日野市豊田1.896 萩嶋泉方(TEL 0425-31-7128)

# 霧積温泉付近のクモ

小林久俊 石山鉄幸 権田重雄

筆者らは1970年7月24日～28日に、群馬県霧積における玉川大生物自然研究部の夏期合宿に参加して、真正蜘蛛類の調査、採集を行なったので、その時の採集目録を報告しておく。

採集地は、蛭井沢一ノ字山峠（標高1,180m）から霧積温泉までの山道及び温泉（1,080m）周辺である。霧積温泉は群馬県の西部、長野県との県境付近にあり、この地域は、日本植物区系の上からは関東ムツ（陸奥）地区のなかにあり、また植物社会学の上からは夏緑広葉樹林帯、すなわちミズナラーピナクラス域に相当する。

採集方法は、スヴィーピングとビーティングを交じえて、主としてハンドソーティングによった。

サラグモ科、コサラグモ科、その他種名未決定のものがいくらかあるが、属の決定できたものについては sp. で挙げた。以後、同定できたものについては、機会を新たに発表したいと思っている。目録番号の2、3、15、60、の4種は八木沼健夫氏に同定していただいた。

採集者は和名の後に、K（小林）、I（石山）、G（権田）で示した。

なお、本稿を草するに当り、日頃から、同定、文献等お世話になっている八木沼健夫博士、萱嶋泉博士に感謝いたします。

## 目 錄

### I AMAUROBIIDAE

1. *Amaurobius* sp. ♀

ガケジグモ科

KIG

### II ULOBORIDAE

2. *Uloborus yesoensis* (Saito)

ウズグモ科

KG

### III PHOLCIDAE

3. *Pholcus opilionoides* (Schrank)

ユウレイグモ科

G

### IV THERIDIIDAE

ヒメグモ科

4. *Enoplognatha margarita* Yaginuma

シロタマヒメグモ

IG

5. *Episinus kitazawai* Yaginuma

シモフリヒシガタグモ

KG

6. *Rhomphaea sagana* (Doen. et Str.)

ヤリグモ

KIG

7. *Chrysso punctifera* (Yaginuma)

ホシミドリヒメグモ

K

8. *C. venusta* (Yaginuma)

コガネヒメグモ

KIG

9. *Theridion japonicum* Boes. et Str.

ヒメグモ

K

10. *T. lunatum* (Clerck)

カグヤヒメグモ

K

11. *T. rapulum* Yaginuma

ギボシヒメグモ

IG

12. *T. tepidariorum* (C. Koch)

オオヒメグモ

KIG

KISHIDAIA No.35 1973, May.

13.	<i>Theridion takayense</i> Saito	タカユヒメグモ	KIG
14.	<i>T. yunohamense</i> Boes. et Str.	ユノハマヒメグモ	KI
	V NESTICIDAE	ホラヒメグモ科	
15.	<i>Nesticus terrestris</i> Yaginuma	チビホラヒメグモ	G
16.	N. sp. ♂♀	ホラヒメグモ一種	KIG
	VI LINYPHIIDAE	サラグモ科	
17.	<i>Arcuphanes osugiensis</i> (Oi)	オオスギヤミグモ	K
18.	<i>Neolinypbia fusca</i> Oi	クスミサラグモ	I
19.	N. <i>japonica</i> Oi	ツリサラグモ	KG
20.	N. <i>angulifera</i> (Schenkel)	ハンモックサラグモ	KIG
21.	<i>Prolinypbia longipedella</i> (Boes. et Str.)	アシナガサラグモ	G
22.	P. <i>marginata</i> (C. Koch)	シロブチサラグモ	I
	VII MICRYPHANTIDAE	コサラグモ科	
23.	<i>Erigonidium nigriterminarum</i> Oi	ハシグロナンキングモ	KG
24.	<i>Gnathonarium dentatum</i> (Wider)	ニセアカムネグモ	K
25.	<i>Strandella quadrimaculata</i> (Uyemura)	ヨツボシアカムネグモ	G
	VIII SYMPHYTOGNATHIDAE	ヨリメグモ科	
26.	<i>Conoculus lyugadinus</i> Komatsu	ヨリメグモ	K
	X ARGIOPIDAE	コガネグモ科	
27.	<i>Araneus ishikawai</i> Kishida	イシサワオニグモ	KG
28.	A. <i>cucurbitinus</i> Clerck	ハナオニグモ	I
29.	<i>Neoscona doenitzi</i> (Boes. et Str.)	ドヨウオニグモ	G
30.	N. <i>scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ	G
31.	<i>Pronous minutus</i> (Saito)	コオニグモモドキ	KIG
32.	<i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ	IG
33.	<i>Cyclosa argenteoalba</i> Boes. et Str.	ギンメッキゴミグモ	IG
34.	C. <i>atrata</i> Boes. et Str.	カラスゴミグモ	K
35.	C. <i>ginnaga</i> Yaginuma	ギンナガゴミグモ	K
36.	<i>Meta kompirensis</i> Boes. et Str.	タニマノドヨウグモ	K
	X THERIDIOSOMATIDAE	カラカラグモ科	
37.	<i>Theridiosoma epeiroides</i> Boes. et Str.	カラカラグモ	I
	XI TETRAGNATHIDAE	アシナガグモ科	
38.	<i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma	オオシロカネグモ	KG
39.	L. <i>subblanda</i> Boes. et Str.	コシロカネグモ	KIG
40.	<i>Tetragnatha pinicola</i> L. Koch	ミドリアシナガグモ	IG

41.	<i>Menosira cericea</i> (Saito)	キヌキリグモ	IG
	<b>XII ARGYRONETIDAE</b>	ミズグモ科	
42.	<i>Cybaeus nipponicus</i> (Uyemura)	カチドキナミハグモ	KG
43.	<i>C.</i> sp. ♀	ナミハグモ一種	G
	<b>XIII PISAURIDAE</b>	キシダグモ科	
44.	<i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch	イオウイロハシリグモ	G
45.	<i>Pisaura lama</i> Boes. et Str.	アズマキシダグモ	G
	<b>XIV LYCOSIDAE</b>	コモリグモ科	
46.	<i>Pardosa ferruginea</i> (L. Koch)	タカネコモリグモ	G
47.	<i>P. laura</i> Karsch	ハリグコモリグモ	G
48.	<i>P. T-insignita</i> Boes. et Str.	ウズキコモリグモ	IG
49.	<i>Pirata piraticus</i> (Clerck)	カイゾクコモリグモ	I
50.	<i>Arctosa</i> sp. ♀	ミズコモリグモ一種	IG
	<b>XV THOMISIDAE</b>	カニグモ科	
51.	<i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ	G
52.	<i>Synaema globosum japonicum</i> Karsch	フノジグモ	G
53.	<i>S. takashimai</i> (Uyemura)	アマギエビスクグモ	K
54.	<i>Tibellus oblongus</i> (Walckenaer)	スジシャコグモ	I
55.	<i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ	G
56.	<i>T.</i> sp. ♀	トラフカニグモ一種	G
57.	<i>Xysticus croceus</i> Fox	ヤミイロカニグモ	G
58.	<i>X. saganus</i> Boes. et Str.	オオヤミイロカニグモ	K
	<b>XVI SALTICIDAE</b>	ハエトリグモ科	
59.	<i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリ	G
60.	<i>E. albifrons</i> (Kulczyński)	マエシロハエトリ	G
61.	<i>Hasarius doenitzi</i> Karsch	デニッシュハエトリ	G
62.	<i>Jotus difficilis</i> Boes. et Str.	マガネアサヒハエトリ	G
63.	<i>J. linea</i> (Karsch)	メガネアサヒハエトリ	G
64.	<i>Marpissa elongata</i> (Karsch)	ヤハズハエトリ	G
65.	<i>M. roemerii</i> Strand	オオハエトリ	IG
66.	<i>Plexippus incognitus</i> Doen. et Str.	ウススジハエトリ	IG
	<b>XVII CLUBIONIDAE</b>	クログモ科	
67.	<i>Chiracanthium eutitha</i> (Walckenaer)	アシナガコマチグモ	G
68.	<i>Clubiona lena</i> Boes. et Str.	トビイロフクログモ	G
69.	<i>C. vigil</i> Karsch	ムナアカフクログモ	G

KISHIDAIA No.35 1973, May.

70. <i>Clubiona</i> sp.	♀	フクログモ一種	G
71. <i>Phrurolithus claripes</i> (Doen. et Str.)		イナズマウラシマグモ	KG
72. <i>P. nipponicus</i> Kishida		ウラシマグモ	I
XVII. ANYPHAENIDAE			イズツグモ科
73. <i>Anyphaena ayshides</i> Yaginuma		ナガイズツグモ	K
XX. HETEROPODIDAE			アシダカグモ科
74. <i>Micrommata roseum</i> (Clerck)		ツユグモ	G

今回、19科74種（6不名種）を記録したが、群馬県からのクモの報告は、沼田（武井武一）、尾瀬（新海栄一・井上明夫）がある。

### 参考文献

- 八木沼健夫（1968）原色日本蜘蛛類大図鑑 保育社  
 ————（1970）日本の真正蜘蛛類相 国立科学博物館研究報告 13(4) : 639-701  
 ————（1970）The New species of Small nesticid spiders of Japan.  
 Bull. Nat. Sci. Mus., 13(3) : 385-394  
 大井 良次（1960）Linyphiid spiders of Japan.  
 Jour. Inst. Polyt. Osaka City Univ.,  
 D11:137-244

### 蜘蛛の王ミシャッサ

『異常なぞつとする蜘蛛人たちの背にかつがれて、ぼくは無気味な都市の奥深く連れこまれた。かすかに光る岩に照らされたそこはなんの計画も目的もない迷路だった。（中略）彼らはぼくを強い腕にかかえて先を急いだ。どんな運命が待ちかまえているのかぼくには推測できなかった。たぶんぞつとするような儀式をおこなってぼくを食べてしまうのだ——ぼくは彼らの巣に入った蝶になろうとしているのだ！（中略）下を見おろすと、とつぜん二つの巨大な目が見えた。少なくとも直径4フィートはある目がぼくたちをじっと眺めているのだ。それは蜘蛛の目だった。……………』

これは最近出たハヤカワSF文庫「火星の戦士 蜘蛛の王」（矢野徹訳）の中の一節である。原題を“THE LORD OF SPIDERS”（by Michael Moorcock）といい、内容は主人公のマイケル・ケインが物質移送機なる代物で火星へ旅する途中様々な事件にまき込まれるという冒險物語である。この中で放射能のために異常に発達した蜘蛛人間が登場する。そしてその王の名前をミシャッサという。クモはその容姿や習性からしばしばこのような小説の材料に使われるが、その役柄がはなはだ悪惡なのは遺憾である。題名を見て思わず買ってしまったが、息抜きには格好であると思うので、SFの好きな向きにはおすすめする。早川書房、240円。  
 (H. O.)

## 小観察あれこれ(2)

高野伸二

### ◎スジプトハシリグモの3回産卵

1972年4月3日、都下五日市の秋川へ行った折、多数のスジプトハシリグモ(亜成体)が地上を歩いているのを見て、その中の♂1匹ずつを持ち帰り飼育を始めた。4月19日に♀は脱皮し、4月26日に♀が脱皮して共に成体となったので、4月26日、♂♀を同一のうつわに入れたところ、♂は第1、第2歩脚をこまかくふるわせながら♀にさわり、♀はじっと動かず、♂は♀の上にのって触肢を♀の腹側にまわし交接しようとしたが、果して成功したかどうかはっきりしなかった。27日にも♂♀をいっしょにしたが、この時は♂が近づいても♀が逃げ明らかに不成功。5月13日夜、♀は産卵、卵のうを触肢で保つと共に糸疣から糸を出して卵のうにつけていた。その後、♀は食物をあたえてもとらず、6月4日に子ぐもが卵のうから出て、団らんを始めた。産卵後22日目。6月15日大部分の子ぐもは分散。その後♀は元気よくえさをとり、腹部が大きくなり、7月3日に第2回目の産卵をした。すでに♂は逃げていてこの間交接はしていない。7月13日子ぐもが出て団らんを始め、7月19日には分散していた。この♀はその後も元気で、8月17日に3回目の産卵をしたが、卵のうは直径3mmぐらいの小さいもので、おそらく内容は未受精卵であろう。それでも口につけていたが、8月27日そのまま死亡していた。成体になって123日目であった。

この観察でハシリグモの中には2回以上産卵するものがあること、相当間隔をおいた(この例では52日目)産卵でも新たに交接をしないで有精卵が産めること、ハシリグモの交接に際し、♂が♀にえさをわたすことが報じられているが、それをしなくとも交接しうることなどがわかった。

### ◎キクヅキコモリグモの2回産卵

1972年5月28日、埼玉県高坂で畑の地上を歩いている卵のうを糸疣につけたキクヅキコモリグモ(♀成体)をとった。卵のうは径約8mmで白色。このクモを直径約1.5cm、高さ4cm位の大型シャーレに土を入れて飼育したところ、5月30日シャーレの側壁にそって長径3cm、短径2cmのだ円形の住居を糸で作り、土塊・木くず等を上側につけてカムフラージュしていた。中では子ぐもが出て、親の背にのりつつあった。6月2日かくれがを出てシャーレ内を徘徊、6月7日頃、子ぐもは分散。その後この♀はえさをよく食べて元気でしたが、7月3日に姿が見えなくなり、不注意のため逃亡したかと残念に思っていたところ、7月13日に子ぐもをたくさん背にのせた親ぐもが突然シャーレ内に出現したのにはびっくりした。よく見ると、シャーレ内に土塊でカムフラージュした部屋があった。姿を消した時にはよく見たつもりであったが、土のへこみを利用し、隠れもたくみであったので見のがしたらしい。7月19日、旅行先から帰ってみるとすでに子ぐもは分散していた。7月24日死亡。

今回の観察でキクヅキコモリグモは2回産卵するものがあること、産卵に際してかくれ家を作ることがわかった。5月28日に卵のうをつけて歩いているのを見つけたのは、枯れ草等をのけてクモをさがした際、かくれ家がこわれたのではあるまいから。2回目の産卵の例からは、かくれ家を作って、

KISHIDAIA No.35 1973, May.

産卵し子ぐもが孵化して卵のうを出た後でかくれ家をはなれるのが正常のように思われた。しかし、以前に千葉県の埋め立て地で撮影したキクヅキコモリグモ（八木沼先生に写真をお送りして同定して頂いた）は、材木の上で足を伸ばし、卵のうを太陽の方に持ち上げるようにして、いかにも日光浴をしているように見え、何かに驚いて下側にかくれても、しばらくすると同じ場所に出て来た。10月はじめのことであったが、かくれ家にじっとしている習性と、どう結びつけるか。今回飼育したコモリグモの標本は新海さんにお渡ししてあるので、もう一度種名を確認していただいた方がよいかもしれない。我々のまわりでいちばんよく見られるウツキコモリグモも2回以上産卵するものがあるのだろうか。

#### ◎滝山のクロトリノフンダマシとゲホウグモ

1972年8月9日、八王子市外滝山へクモを観察に行ったところ、林に囲まれたススキの原で、ススキの葉のうらにとまっているクロトリノフンダマシ♀を見つけた。この附近はわりにトリノフンダマシ類が多く、この日も他にオオトリノフンダマシ、トリノフンダマシ、シロオビトリノフンダマシがいた。クロトリノフンダマシは島部をのぞいては東京ではじめての記録とか。

9月9日、新海さん、松本さん、大利さんのおともをして滝山へ行き、8月9日に見たクロトリノフンダマシをさがしたが見つからなかった。この場所は昨年秋、ゲホウグモを何匹も見たところなので、附近のサクラの枯れ枝をゆすったところ、ゲホウグモの幼生が5匹以上糸をたれてぶらさがってきた。昨年はコナラの枯れ枝をゆすってゲホウグモを見つけたが、あの木の芽に似た形でじっとくまる態度から見ても、少なくとも幼生のうちは枯れ枝にいることが多いのではないかと考えたくなる。それにしても、9月、10月と幼生で見つかった（10月の方が大きい）滝山のゲホウが成体になるのは何月なのだろう。その頃、ぜひ見つけたいと思っている。

#### ◎シロオビトリノフンダマシの産卵

1972年8月9日にススキの葉のうらにいたシロオビトリノフンダマシを滝山から持ち帰り、管ピンでいれておいたところ、8月10日の朝、すでに卵のうを作っていた。卵のうはオオトリノフンダマシのものより、更に細長く、長さ約2.1cm、巾約0.3cmで、鮮やかな黄色であった。この卵のうを、その後の経過を見ようと庭の木の枝につけておいたのに、強風のため紛失したのは残念であった。

#### ◎カノコガはやっぱりまずいのか

前の報文で、コガネグモがあみにかけてやったカノコガを糸をまかないで、糸を切って網から落した例を書いたが、1972年6月22日、飼育中の大きなスジボケハシリグモにカノコガをあたえてみた。クモはカノコガを足でかかえこんだがかみつくことはせず、そのままじっとしており、カノコガが動くとその度に足でかかえ直したが、とうとうかみつかないで、カノコガはクモからはなれ容器のふちにのぼってから飛び去った。来年は多くのクモにカノコガをあたえてみたい。

ただ前にも書いたように、カノコガはササグモにはよく食べられている。

## 巣箱にいたクモ

石山鉄幸

R・ショーパンが「昆虫の世界」の中で言っているように微気象により森林の地上部や樹上部では、小さな動物にとって生きて行くための条件がかなり異ってくると思います。筆者は、1971年6月16日に10個、1972年10月26日に8個、それぞれシジュウカラ用の巣箱を調べる事が出来ました。

巣箱はクヌギ・コナラの二次林の地上より4~5mぐらいの高さの所にかけてありました。シジュウカラ用の巣箱は入口が小さいので、Balloon ingによって巣箱の中に入った事やクモが鳥の体にくついて巣箱の内に入ったとは考えられず、地上より登って入ったようと思われます。また、徘徊性のものは、地上と行き来している可能性があると思われます。

また、巣箱の中は暗くカマドウマ、クロゴキブリなどの昆虫もたくさんいます。また、おもしろいと思ったのは屋外で良く見つかるダニグモ、コアシダカグモが採集されたことです。

採集日：1971年6月16日、1972年10月26日

採集地：玉川学園構内のクヌギ・コナラの二次林

1.	<i>Gamasomorpha cataphracta</i> Karsch	ダニグモ	成体3♀
2.	<i>Theridion tepidariorum</i> C. Koch	オオヒメグモ	幼生1♀
3.	<i>T. sterninotatum</i> Boes. et Str.	ムナボシヒメグモ	成体1♂
4.	<i>Coelotes</i> sp.	ヤチグモの一種	幼生1♀、1♂
5.	<i>Oxyptila decorata</i> Karsch	キハダカニグモ	成体1♂
6.	<i>Philodromus spinatarsis</i> Simon	キハダエビグモ	成体1♀、幼生1♀
7.	<i>Heteropoda forcipata</i> (Karsch)	コアシダカグモ	亜成体1♂
8.	<i>Gnaphosidae</i> gen. sp.	ワシグモ科の一種	幼生4♀
9.	<i>Gnaphosidae</i> gen. sp.	ワシグモ科の一種	幼生3♀

### 報告

### 多足類・蜘蛛類合同例会

去る11月25日付の往復葉書でお知らせしました例会が、雨にもかかわらず、36名もの大勢で、開かれました。内容はプログラムでお知らせの通り生態学関係のものが多くなり今までの例会には

KISHIDAIA No.35 1973, May.

みられないものとなりましたが、ムカデもクモも他の動物群とかかわりなく生活しているわけではありませんので、このような分野で研究をされている方々の報告を聴くことで、随分ためになつたことだと思います。自己紹介のとき各々のご研究の紹介をしてもらつた際にも、研究のむずかしさや、それを解決するヒントなどもご教示して下さつたりで、独りで考へてゐるよりは、はるかに能率のよい1日を過ごすことが出来ました。30~40名程の集まりですと、シンポジウム形式の内容もより有効になるかもしれません。あるいは、1日中、自己紹介という形をとっても楽しい時を過ごせるかと思います。石井規雄・石井清・栗原輝代子・小林健一・国見裕久・福山研二・新海栄一の各方々から、パンフレットが配布されました。とりとめなく、例会の報告にもならないかも知れません。お許し下さい。

栗原輝代子氏は「ジョロウグモ♀の内部構造・クサグモの振動による反応」のパンフレットを、また福山研二氏は、「中形土壤動物調査法について」のパンフレットを配布して下さいました。

#### 〔参加者〕

赤間日吉・石井清・石井規雄・石山鉄幸・上野俊一・大野正男・小沢実樹・加藤宏保・萱嶋泉・国見裕久・熊田憲一・栗原輝代子・小林健一・近藤昭夫・権田重雄・斎藤博・佐藤幸子・篠原圭三郎・渋谷清美・白井哲夫・新海明・新海栄一・鈴木恵一・高野伸二・高野光男・高橋登・高林桂子・竹中英雄・田中理恵・芳賀昭治・福山研二・古内栄一・松本誠治・山川守・渡辺隆一（50音順・敬称略）

### 編 集 後 記

前号（版34）との間が、大変あいてしまいました。申し訳ありません。会をよりよい方向にと討議を重ねていますので、発展的結果が生まれると思います。宜しくご協力下さい。皆さんそれぞれに以前よりも忙がしい日々をおくっていられるようですが、KISHIDAI Aの存在もお忘れなく。（虎）

ようやく35号が出来ました。ドクグモ科の和名については現在論議中ですが、本誌ではコモリグモに統一することにしました。どんな小さな記事でもどんどんお寄せ下さい。（鷹）

#### KISHIDAI A 版35

1973年5月30日印刷

編集者 松本誠治

1973年5月31日発行

小野展嗣

発行者 萱嶋泉

発行所 東京蜘蛛談話会

〒191 東京都日野市豊田1896 萱嶋 泉方

PHONE 0425(81)7128

印刷所 東京都豊島区目白2丁目14-2

小山タイプ